平成28年（2016）
阿づまの光
10月号・Oktobro

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「紫」

【ヨルダン土・教主さまお手植えみろく村ムラサキ釉】

題字出口直日
通巻第571号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

厳と瑞陰と陽との神徳を
世に照らします伊都能売の神

出口王仁三郎聖師

神島開き百周年と伊都能売神諭

愛善宣教課主任　柿崎哲男

去る9月7日から9日にかけ、関東教区の皆さんとマイクロバスで神島開き百周年記念祭典に参拝させていただき、百年前の神島まいりの神事を偲ばせていただきました。

8日当日、東京からのバス組は、天恩郷みろく会館前を午前6時出発。台風13号の影響か、姫路港までの2時間は、道中、パーキングエリアでの休憩を断念するほどの豪雨に。現地で準備を進めているであろう先輩諸兄の姿を思い浮かべつつ、〝おきよめの雨〟と心の中で念じながらもいつの間にか白河夜船。気が付けば曇天の姫路港、姫路みなとドームに到着しました。

雨上がりの港は潮風が清々しく、黒雲がゆっくりと青空に変わってゆくのを感じました。玉串受付や乗船手続きを済ませ、東京バス組は第6便「すいせい号」に乗船。停泊中もすでに上下に揺れていて、「これは波が荒いぞ」と唾をゴクリ。出港予定の9時15分前、船員さんが人数確認し早めに出発。予想通りの高波、狭い甲板には雨とも波ともつかない強いしぶき。鈴木花枝総務先達で一同真剣に神言を奏上させていただき、約20分、青空の下に浮かぶ神島に到着。海上とはまさに別天地、因縁の神さまがお隠れになっていた一つ島、霊妙な世界を体感させていただきました。

今回の祭典では、総勢585人が参拝や係員として上陸し、歴史的神事にお仕えさせていただきました。開祖さま、聖師さま、二代さま、三代さまがおそろいでお渡りになられた大正5年から百年の佳節。国常立尊さまが開祖さまに、「天のみろくさまが聖師さまである」との神秘を明かされた時でもあり、翌大正6年には、根本経典『大本神諭』が発表され、聖師さまの救世のご神業が急展開してゆきます。

奇しびに妙なるこの秋に、教主さまから『いづのめしんゆ』の公刊が許されました。大正7年の開祖さまご昇天ののち、厳の御霊、瑞の御霊のご神格を併せ持った、伊都能売の身魂としての聖師さまを通して神示された、国祖・国常立尊さまの立直しの神諭です。

発表から約百年の星霜を経て、あらためて『いづのめしんゆ』の拝読を許される、私たち大本信徒の使命を思うとき、身が引きしまる思いがいたします。

oomoto 開座公講

祝詞（のりと）の心

～感謝と祈り～

大本青年部長　西山桂一郎

祝詞とは

大本の祝詞とはどのようなものなのか、私たち大本信徒が毎日の礼拝で使っている、この『おほもとのりと』で説明させていただきたいと思います。

その前にまず「のりと」の意味についてですが、漢字で書きますと「祝詞」となります。「祝」の左側は「示」で、これは〝神〟とか〝マツリ〟を意味します。右側の「兄」は、「口」と「人」と上下に分けることができ、「神さまに人が口をもって申し上げることがら、言葉」が祝詞ということが見えてきます。

では、その祝詞のことがら、言葉には、どのようなことが書かれているのでしょうか。大本でも一般でも奏上される祝詞には、その内容に大きく三つの要素が含まれています。一つには神さまをお称えする「讃美」の言葉、二つ目が日々ご守護いただいていることに対しての「感謝」の意、そしてその時々の「祈願」が込められています。

言霊（ことたま）の幸はふ国

祝詞は、すべて声、言葉に出して奏上しますが、これを「言霊」で奏上させていただくともいいます。「言霊」は一般的に「コトダマ」と読むようですが、大本では「コトタマ」と濁らずに表現しています。

日本では古くから「言霊の幸はふ国」とか、「言霊の照り渡る国」、「言霊の生くる国」といってきました。それは祝詞奏上のときや、天地神明、自然に対して発声するだけでなく、人を傷つけ、やる気を無くさせる力や、その逆に人を勇気づけ、やる気を出させる力も併せ持っていることを強く感じていたからです。日本人は昔から、言霊を大切にし、声、言葉を発することは、大変重みのあることとしていたのです。

言葉がもっている力

では、言霊とは一体何なのでしょうか。私は今、皆さんに声を通してお話ししています。これを言霊で解釈すると「コエ」とは「心の柄」がつづまったもので「ココロエ」が転じて声、つまり「心の現れたものが声」ということになります。

人間の肉体に霊魂が宿っているように、言葉の中にも「タマシイ」が込められており、それが音声となって、意味や力、働きを持つようになると教えられています。それが言霊の力です。

一例をあげて「ト」という音、言葉、言霊について紹介します。人にお酒をついでもらうとき、おチョコから溢れそうになったら、思わず「おっとっと…」と言います。この言葉は誰に教わるわけでもなく自然と口をついて出る表現です。この「ト」という言葉には、「止まる」とか「留まる」という力が備わっています。誰かが勢いよく走っている時に、「おいっ」と声をかけてもすぐには止まりません。「おっとっと…」と声をかければ、止まりやすくなります。

ここにとても重たい石があるとします。そこに「へ」という言葉を掛け声に、この石を持とうとします。しかし「へー」では力が入りません。そこで、掛け声を「ウ」の言葉に変えてみます。すると掛け声と同時に力が入り、重たい石でも自然と持ち上げることができます。「ウ」や「ウン」という言葉は力の源だと言われています。言霊にはそれぞれに力と働きがあるのです。

神さまのご意思が働く時

言霊について、出口王仁三郎聖師さまは、「神さまのご意思が働くとき言霊となる」と示されています。神さまのご意思が働くときとはいつなのでしょうか。これは宇宙のはじまり、天地剖判にさかのぼります。実は言霊の力によって宇宙は創造されたというのです。

『天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の丶忽然（ほち）と顕れ給ふ。この丶たるや、澄みきり澄みきらひつつ、次第次第に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描き丶を包み、初めて⊙（ス）の言霊生まれ出でたり。この⊙の言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神国の大本となり給ふ』

（『霊界物語』第73巻第1章）

天もなく、地もなく、宇宙もはじまっていないというのですから、なかなか想像のつきにくい場面ですが、宇宙の造化の原初を示されたお示しです。この⊙（ス）から七十五声といわれる言霊が生まれるわけですが、その成り立ちもお示しいただいています。

『清朗無比にして、澄（す）みきり澄みきりスースースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び拡ごり膨れ上り、遂に⊙（ス）は極度に達してウの言霊を発生せり。ウは万有の体を生み出す根元にして、ウの活動極まりてまた上へ上へと昇りアの言霊を生めり。またウは降っては遂にオの言霊を生む』

（『霊界物語』第73巻第1章）

このような感じで、「エ」「イ」の言霊も誕生していきます。

こうして五十音のタテの列が生まれ、聖師さまはこれを「五大父音」と名付けました。その後「カサタナハマヤラワ」と言霊が広がってゆき、さらに七十五声になり、主（ス）の神さまはこの言霊の力を活用され数十億年をかけ、全大宇宙をお創りになったわけです。

キリスト教の聖書、ヨハネ伝の「太初（はじめ）に道（ことば）あり、道は神と偕（とも）にあり、道は即ち神なり」「万物これに由（より）て造らる、造られるたる者に一として之に由（よ）らで造ら

れしは無（なし）」は、まさにこれと同じことだと聖師さまはお示しになっています。

五大父音は現在でも地球上に鳴り響いています。万が一この音が止まった時は、宇宙の活動が止まる時です。大宇宙に鳴り響くこの言霊は、普段は聞こえません。人間には一番大きい音と一番小さい音は聞こえないようになっているそうです。

この五大父音を聞きたい人は、指で耳の穴を塞いでみてください。ゴォォーという音が聞こえませんか？　これが宇宙に鳴り響いている五大父音です。主の大神さまの大いなるご意思の働きを、音、言霊として、なんとなく感じさせていただけるのです。

大本で奏上している祝詞

大本では毎日の礼拝で『おほもとのりと』にある6種類を使い分けて奏上させていただいています。その中の一つ、天津祝詞を説明させていただきます。

天津祝詞は延喜式には「禊祓詞（みそぎはらへのことば）」として載っています。この天津祝詞はどのような意味で、何が書かれているのでしょう。聖師さまは言霊学の視点から、細かく読み解いています。

最初の高天原については、「タ」＝霊、「カ」＝体、「ア」＝言霊、上がる意、「マ」＝円満具足を示し、「ハ」＝四方に開くの意を表し、「ラ」＝螺旋を現わす、というように、一音一音に意味があり、大きく分けても10数通り、小さく分けるとより多くの解釈ができるといわれています。

その「タ・カ・ア・マ・ハ・ラ」「高天原」とは、全大宇宙、または全大宇宙の中心地という意味があり、大宇宙には主の大神さまの霊的方面かむろぎと、体的方面かむろみのご活動がある。その活動力によって、宇宙造化のために天地を清め、全ての神意に反すること、罪・穢れを祓い清めていただきますように、天地の天使（神々）もご一緒にご活動くださいませ、というのが天津祝詞の大意とされています。

つまりこの天津祝詞は、全大宇宙を祓い清める祝詞、宇宙間のリズムの乱れの調整やゆがみを軌道修正する祓いの言霊であり、また個人の罪穢れを祓う祝詞なのです。

祓いとは

日本人が発する音声を言霊学では七十五声といいますが、言霊の初めの五大父音は、アイウエオではなくアオウエイと発声します。

天津祝詞の一節「アハギガハラ」とは言霊学上では全大宇宙という意味があり、「ア」は洗う、「ハ」は開く、「ギ」は中心、「ハラ」とは広いところ、海原などを指しています。「みそぎ祓ひ」とは、「ミ」は体、身体、物質界などのことで、「ソギ」はすすぐという意味であって、体とか物質界など大掃除、大洗濯のことです。

また、「ハライ」とは祓う、または洗うという意味があります。心や体の垢を洗い去る、つまり修祓とか潔斎のことで、これには大潔斎と中小の潔斎があります。

大本の教義で示されるところの大潔斎とは宇宙の潔斎、中潔斎は国土や社会の潔斎、小潔斎は一身一家、または個人や家庭の潔斎、これらをすべて潔斎といいます。そして潔斎のために重要な言霊が天津祝詞なのです。

また、天津祝詞には「曲事罪穢（まがことつみけがれ）」という文言があります。「マガコト」とは神さまの御神意から外れること、「ツミ」とは包み隠す、中身の汚いものを包んで表面的には美しい物に装うことと示されています。また、せっかくの宝を包み込んで、真価を現わさないことも「ツミ」、つまり罪であります。

悪いことをするのも罪、良いことができるのに敢えてしないことも、また罪なのです。例えばお金でもずっと積んでいたら、利己主義、自己本位になって、罪になるということです。

そして「ツミ」に続く「ケガレ」というのは、気持ちが枯れることをいいます。気、生気が枯れることです。お葬式などに参列して、笑顔で帰ってくる人は少ないと思いますが、シュンとなって帰ってくる姿、これが一つの「気が枯れている」状態です。これを祓うために、葬儀に参列した後は、修祓を受けたり、切り火をしたり、また塩をまいたりします。

このように大宇宙の修祓のため、天地の神々のご活躍を願うとともに、私たちも天地経綸の主体としてしっかり活動させてください、と神さまに誓う祝詞が、この天津祝詞なのです。

世の祓い清めを祝詞のこころとして

大本には梅松苑と天恩郷の両聖地や、東京本部をはじめ、全国に多くの教会があります。各個人の家庭も含め、全てのご神前で、毎日、朝拝・夕拝の天津祝詞が奏上されています。

大神さまに日々の感謝とお詫びをさせていただくことは、当然のことですが、さらに、度重なる震災や、風水害の被害に対する復興の祈願を込めて、毎日、真剣に祈らせていただいております。

5年前、突如東北や関東地方を襲った東日本大震災、被害の全貌が、まだまだ見えていない熊本大地震、その他諸々の「曲事罪穢」を祓い清めていただくために、私たちは、ただひたすらにこの祓いの祝詞・天津祝詞を大神さまに真剣に奏上させていただきたいと思います。

掲載文は、平成28年6月15日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭（長寿感謝祭・交通安全祈願）ならびに秋季合同慰霊祭は、9月11日、午前10時30分から、斎主・猪子恒東京宣教センター次長のもと執行され、314人が参拝した。

祭員は関東教区各主会青松会員、伶人は二絃の会関東支部、大本神論拝読は松香分苑青松会の佐和山優子さん、添釜は茨城主会が担当した。

祭典後、猪子次長があいさつ。9月月次祭参拝への謝辞を述べたのち、9月8日に執行された神島開き百周年記念祭典に合わせ、大本本部から新たに刊行された『いづのめしんゆ』の内容についてふれ、世の立直しの啓示として示された、同神論の現代的意義などについて紹介した。

引き続き、関東教区青年部が夏期学級や第24回大本青年祭での奉納の様子などを紹介。また、東光苑月次祭後に行っている献金バザー、災害義援金活動等、一年間の活動をスライドショーで報告した。

最後に恒例の「長寿祝式典」が行われ、列席者18人を紹介。渡辺弘子直心会茨城連合会長から祝辞と記念品の授与があり、列席者を代表して、東京主会の渡辺郁郎さんが答辞を述べた。

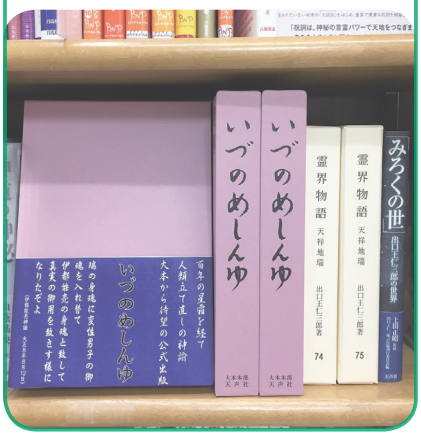
当日列席者＝米寿／渡辺郁郎（東京）、岩下多計（群馬）、池田まつよ（茨城）、原澄江（神奈川）、喜寿／田中登美・垂石栄七郎（東京）、瀬戸口弘海（栃木）、高杉昭廣・佐藤美津子（神奈川）、木村郡志・鎌倉平八郎（千葉）、阿部宇多子・野口松生・高嶋竜代・勢木紘治郎・畠山真伸（茨城）、瀬戸斐子・鈴木十三郎（埼玉）

長寿祝式典に参加された皆さん

書籍宣教活動展開中!!

都内大型書店のジュンク堂池袋本店＝写真（南池袋、03-5956-6111）、書泉グランデ（神田神保町、03-3295-0011）で、『いづのめしんゆ』『天祥地瑞』などの大本教典を陳列・販売しています。大本のご神書を、より広く一般の方に触れていただく首都宣教の試みです。

ぜひご利用いただき、継続的な活動としてご協力をお願いいたします。電話注文で、天声社の書籍を取り寄せることも可能です。



秋を愛でる夕べ

東光苑秋をめでる夕べは、9月15日（旧暦8月15日）午後6時から8時まで催され、一般を含む49人が来苑。

朧月のもと、東光庵にて高野社中による薄茶接待、ロビーではお神酒接待が行われ、路地を照らす行灯と能楽の調べが、幽玄の世界を演出した。

東光苑道場講座

東光苑道場講座は、9月17日から19日の3日間、東京宣教センターを会場に開催され、のべ30人が受講した。

この講座は天恩郷での4日半の大道場修行を3日間に凝縮したもの。八雲琴での鎮魂、食作法を始め全14講座を実施。2年以内に梅松苑での残りの講座を受講すると、修了証が渡される。

受講者からは「今後の生き方の方向性を得ることができた（女性）」「大本の教えは本物であると確信した（男性）」等の感想が聞かれた。

大本公開講座

「第163回大本公開講座」は、9月21日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、出口飛鳥メディア愛善宣教課主事が「大本の教風～根源美の探求～」と題して講話した。参加者は31人（内、一般5人）。

講師は、「〝信仰即芸術即生活〟という教えがあるが、芸術には神の心が宿っている」として、「信徒一人ひとりが芸術を実践して生かされる喜びを感じ、魂の向上を目指すことが大本の教風である」と語った。

参加者からは「スクリーンに映し出された作品の美、話し手の美、聴衆の美、会場全体の雰囲気に天国の美を感じた（男性・一般）」等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

10月

9日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

15日（土）午前10時30分執行
家庭平安祈願祭（第25回）

18日（火）午後7時
霊界物語全国一斉拝読会（第49回）

19日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 出口すみこが現代に残したもの
講師 出口眞人（愛善信光会理事長）

22日（土）・23日（日）
大学生社会人講座 en TOKIO

11月

6日（日）午前10時30分執行
開教124年 大本開祖大祭遥拝祭

13日（日）午前10時30分執行
東光苑秋季大祭
新穀感謝祭・七五三詣り

16日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題「農は国の大本（たいほん）」
～今求められる食・農問題～
講師 小藪資史（特派宣伝使）

19日（土）午前9時～16時30分
東光苑葬祭研修会

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com